

---



---

## 学内活動報告

---



---

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 4  
P.35-41 (2016)

# 臨地実習に向けたトライアル OSCE 実施報告

## A Report from the Results of Trial OSCE for Nursing Practice

藤 尾 祐 子*	武 井 泰*	佐々木 史 乃*
FUJIO Yuko	TAKEI Yasushi	SASAKI Shino
林 亮*	石 塚 淳 子*	岡 田 隆 夫*
HAYASHI Ryo	ISHIZUKA Junko	OKADA Takao

### 要 旨

近年、医療系教育機関では OSCE (Objective Structured Clinical Examination : 客観的臨床能力試験) を導入する動きがみられ、医歯学教育においては、2005 年から臨床実習開始前の「共用試験」として正式に採用されている。OSCE は、認知領域 (知識) だけでなく、精神運動領域 (技能) と情意領域 (態度) を含めた総合的評価が可能であり、看護学教育においても 2005 年以降、OSCE を導入する大学が増加傾向にある。本学部 (順天堂大学保健看護学部) は 2010 年に開学し、その教育目標に【心身を癒す看護実践能力の修得】を掲げ、1・2 回生を社会に送り出した。開学から 5 年を経た今年 (2015 年) 度、【心身を癒す看護実践能力の修得】を評価する手法として、3 年次の臨地実習直前に OSCE をトライアルで実施した。その結果、開催時期および実施課題、評価基準の再考等、今後への課題はあるものの、受験学生の看護実践能力の評価と臨地実習に向けた学習促進効果は大きく、その継続の必要性が示唆された。今後は、OSCE で自覚した学生自身の課題を復習できるよう開催時期の検討と、実施課題および評価基準を全教員参加で作成する等、今回のトライアル OSCE をベースとして、更なるブラッシュアップが必要と思われる。

索引用語 : 臨地実習、OSCE、学習効果

Key words : Nursing Practice, OSCE, learning effect

### 1. はじめに

近年、医療系教育機関では OSCE (Objective Structured Clinical Examination : 客観的臨床能力試験) を導入する動きがみられ、医歯学教育においては、2005 年から臨床実習開始前の「共用試験」として正式に採用されている<sup>1)</sup>。OSCE が、すでに定着している医学教育の文献には「OSCE は、認知領域 (知識) だけ

でなく、精神運動領域 (技能) と情意領域 (態度) の評価が可能であり、なかでも精神運動領域の評価方法として画期的な方法である」と述べられている<sup>2)</sup>。

また看護学教育においても、「看護学士課程における OSCE 活用の現状と課題に関する文献検討」では、「OSCE を試みた研究論文の年次推移は、2003 年以降に数件ずつ散見されるようになり、2005 年以降増加し、今後も増加すると予測される」と、近年 OSCE を実施する教育機関が増加傾向にあることが報告されている<sup>3)</sup>。さらに、OSCE 導入の先駆的取り組みをし

\* 順天堂大学保健看護学部

\* *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*

(Nov. 13, 2015 原稿受付) (Jan. 22, 2016 原稿受領)

ている看護系大学においては、精神運動領域（技能）について看護実践としての動きや滑らかさなどと認知領域（知識）、情意領域（態度）を含めた総合的評価として OSCE を活用している<sup>1)</sup>。この取り組みは「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」採択事業において報告されている<sup>4)</sup>。このような看護系大学の OSCE 実施の広がり、文部科学省による 2002 年度の「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて（看護学教育のあり方に関する検討報告会）」と、2004 年「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」において「学士課程で育成される看護実践能力」の詳細が示された<sup>5)</sup>ことに依拠すると思われる。

このような看護学教育の背景下、本学部（順天堂大学保健看護学部）は 2010 年に開学し、その教育目標に【心身を癒す看護実践能力の修得】を掲げ、1・2 回生を社会に送り出した。開学から 5 年を経た今年（2015 年）度、【心身を癒す看護実践能力の修得】を評価する手法として、3 年次の臨地実習直前に OSCE をトライアルで実施することとなった。3 年次の臨地実習直前に行われる OSCE は、状況設定のある看護技術を課題としていることで看護技術の習得のみでなく、対象理解を含め様々な状況を理解し、そのうえで実践できる能力を測定できる<sup>6)</sup>ことや、今後の臨地実習に向けて学生が自己の課題を自覚したり、教育の改善に結びつけられる形成的評価としての意義をもつものである。

本学部における 3 年次 OSCE 実施の目的は、「臨地実習に臨むにあたり、看護学生としてふさわしい態度・到達すべき看護技術を身につけているか否かを明らかにする」ことである。副次的には、学生は OSCE に備えて看護技術の復習を行うため、技術レベルの向上を図ることが期待できる。試験結果を学生にフィードバックすることにより、学生に不得手部分を自覚させることができ、学生の自己学習を促すことができる。

学生の成績の傾向を把握することにより、教育の改善を図ることができる。極端な成績不振の学生に対して補習を実施し、臨地実習での不慮の事故を未然に防ぐことができる。などの効果を期待するものである。本稿では、実施後のアンケートから臨地実習に向けて実施したトライアル OSCE について、受験学生への学習効果と全般的な評価から今後の課題について報告する。

## II. トライアル OSCE 実施について

1. 実施対象者：順天堂大学保健看護学部 3 年次学生 119 名
2. 実施日時：2015 年 9 月 29 日（火）9:00～16:00
3. 実施目的：臨地実習に臨むにあたり、看護学生としてふさわしい態度・到達すべき看護技術を身につけているか否かを明らかにする。
4. 到達目標：患者さんにどのような態度で接するべきか、何をしなくてはならず、何をすべきか知っており、そして実行できる。
5. 実施に向けての準備：2015 年 4 月より OSCE ワーキンググループ（5 名）が発足し、9 月実施に向けて準備をスタートさせた。準備としては、実施課題および評価基準、OSCE 実施マニュアル、模擬患者シナリオ、受験学生ガイダンス資料、実施後のアンケート、評価入力ファイルの作成。地域のコミュニティへ模擬患者依頼、本学部教員および臨地実習施設である順天堂大学医学部附属静岡病院 臨地実習指導者への評価者依頼、4 年生 学生ボランティア募集、必要物品の選定および購入等、ワーキンググループおよび事務スタッフで役割分担して準備を進めた。
6. 実施方法：状況設定のある看護技術課題を 5 課題設定し、1 グループ 5 名の学生が 5 ステーションを移動、並行して 4 レーン同時に実施することで 1 クール 20 名の学生が受験できるスタイルとし、午

表1 進行表

進行内容 (課題読み 1分、実践 5分または7分、フィードバック 1分、移動 1分)

受験者数：119名

第1レーン					第2レーン					第3レーン					第4レーン																		
課題	1	2	3	4	5	課題	1	2	3	4	5	課題	1	2	3	4	5	課題	1	2	3	4	5										
1-1	学生	学生	学生	学生	学生	2-1	5名	3-1	5名	4-1	5名	学生	学生	学生	学生	学生	学生	学生	学生	学生	学生	学生	学生	学生									
	1	2	3	4	5							1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5		
	5	1	2	3	4							5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
	4	5	1	2	3							4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
	3	4	5	1	2							3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4
1-2	5名				2-2	5名				3-2	5名				4-2	5名																	
1-3	5名				2-3	5名				3-3	5名				4-3	5名																	
休憩 (50分間)																																	
1-4	5名				2-4	5名				3-4	5名				4-4	4名																	
1-5	5名				2-5	5名				3-5	5名				4-5	5名																	
1-6	5名				2-6	5名				3-6	5名				4-6	5名																	

前60名、午後59名が受験した。各課題5分または7分の時間構成とした。午前の部、午後の部ともに3クール実施し、5課題とも午前と午後は別の状況設定とした。受験学生には2か月前(2015年7月31日)の実習オリエンテーションにおいて、OSCEの実施目的および到達目標、実施方法に加えて事前学習課題を提示した。OSCE当日の進行表を表1に示す。

7. 実施課題：課題は、今後の臨地実習において遭遇するであろう状況を設定した。

各課題のテーマは以下の通りである。

【課題1：コミュニケーション】【課題2：呼吸音の聴取】【課題3：成人の輸液管理】【課題4：小児のオムツ交換】【課題5：片麻痺患者の移乗介助】

8. 模擬患者：状況および対象理解を深めるためにシナリオを作成し、模擬患者役は一般市民に依頼した。よりリアルな患者役を演じるための模擬患者説明会を2回開催し、シミュレーション練習を行った。OSCE当日には、地域のコミュニティより午前の部と午後の部を合わせて、延べ49名の協力を得た。

9. 運営：受験会場設営、使用物品の準備、受験学生、模擬患者、評価者の誘導、スケジュールアナウンス、実施後の後片付けは4年生 学生ボランティアが役

割を担った。受験会場は本学部の実習室1、実習室2に各2レーン5ステーションを設営した。また受験学生の試験前後の待機室を別々に設け、受験学生間での課題についての情報交換を避けた。進行にあたっては、タイムテーブルを基に受験学生、模擬患者、評価者は、すべて4年生 学生ボランティアのアナウンスにより誘導した。

10. 評価：評価者は本学部教員および臨地実習指導者とし、課題ごとに共通の評価項目、評価基準により各課題ともに2名で評価した。各課題が終了した時点で、評価者より受験学生に1分間のフィードバックを行った。評価入力、1クール終了するごとに2名の事務スタッフが行った。

11. 評価結果：各課題50点満点で設定し、評価得点の算出方法は、各課題とも評価者2名の点数を平均して得点とした。結果は、【課題1】【課題2】【課題5】の得点率は60～80%であったが、【課題3】【課題4】は60%を下回り、【課題3(午後)】【課題4

表2 OSCE 評価得点結果 (n=119)

	課題1		課題2		課題3		課題4		課題5	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後
AVERAGE	40.4	40.5	34.6	37.6	25.9	22.8	29.5	21.1	31.8	33.8
STDEV	5.2	3.7	6.1	5.1	8.5	8.2	7.6	6.8	5.5	6.1
MAX	50	47.8	43	47.3	44.5	41.5	43.5	40.3	43.3	47
MIN	28.5	28.8	7.5	16.3	8	6.5	10	5.5	15.5	16.3

表 3 OSCE ワーキンググループの活動内容

ワーキングの活動と主な内容					
	ワーキングメンバー	評価者 (教員・病院)	受験学生	模擬患者	ボランティア 学生
4月	ワーキング会議(1回目) ワーキング会議(2回目) ワーキング会議(3回目)	・課題の設定と検討 ・評価基準の作成 ・実施マニュアルの作成			
5月	シミュレーションの実施	・必要物品の選定と購入 ・模擬患者シナリオの作成		依頼	
6月	ワーキング会議(4回目)	・ガイダンス資料の作成	病院への評価者依頼 教員への説明会(1回目)		
7月	医学部OSCE見学(M6) ワーキング会議(5回目)		教員への資料配布 教員への説明会(2回目)	ガイダンス	募集
8月	ワーキング会議(6回目) ワーキング会議(7回目)				
9月	ワーキング会議(8回目) ワーキング会議(9回目) 医学部OSCE見学(M4) OSC前日準備	・評価入力ファイルの作成 ・学生ボランティア用 マニュアルの作成	病院評価者への説明会	説明会(1回目) 説明会(2回目)	説明会
<b>OSCE実施</b>					
10月	ワーキング会議(10回目)	フィードバック(教員) フィードバック(病院)	フィードバック		

(午後)は50%以下であった。課題別での午前・午後の得点差は、【課題4】が8.4点と大きかった。その他の課題は0.1～3点程度であった。また、【課題3】【課題4】は標準偏差が大きく得点のばらつきを認めた。評価結果を表2に示す。

このように午前、午後の得点に格差を認めたため、受験学生への評価結果の提示は5課題の総合得点ではなく、課題別の得点とした。各課題の評価項目別得点・各課題総合得点および学年平均点の一覧表とレーダーチャートで評価を表示し評価表とした。

12. 評価返却：受験学生への評価返却日は臨地実習がスタートする直前(2015年10月2日)とした。評価表を受験学生に返却した後、各課題を担当した教員より「設定した課題の意図するところ」「評価項目および評価のポイント」「平均点の低い評価項目」について、各課題15分程度の解説をした。評価結果の返却にあたっては、臨地実習参加の可否を振り分けるものではなく、自己の課題を明確にし、臨地実習での学習を促進するためのものであることを説明した。学生の反応としては、OSCE実施直後には落ち込む学生の姿も見受けられたが、数日を

経て評価返却時には冷静に解説を聞き、しっかりメモを取る姿が多く見られた。また、翌週からの臨地実習に向けて、週末も実習室で練習する学生もいた。

13. アンケート：受験学生、模擬患者、評価者、4年生 学生ボランティアにOSCE実施後にアンケートを行った。受験学生には、OSCEに向けた自己学習に関する内容と、OSCEによる臨地実習に向けての学習効果を検証できる質問紙とし、質問内容には、John M. Kellerによる「ARCS 動機づけモデル」を採用した。アンケート実施にあたっては、本学部の研究等倫理審査会の承認を得て実施した。受験学生には無記名自記式によるアンケートであり個人を特定できないこと、学業成績とは関係ないことを説明し調査協力依頼をした。模擬患者、評価者、4年生 学生ボランティアには、倫理的配慮として無記名自記式によるアンケートであり個人を特定できないことを明記し、OSCEの企画、運営、評価に関する質問内容とした。

14. OSCE ワーキンググループの活動の全体像を表3に示す。

### III. OSCE アンケート結果より

#### 1. 受験学生のアンケート結果

受験学生に対して、OSCEに向けた自己学習に関する内容として1)OSCEに備えて看護技術の復習を行いましたか 2)OSCEにより技術レベルの向上は図れましたか 3)OSCEにより自らの学習課題を自覚できましたか、学習効果に関する内容として John M. Keller「ARCS 動機づけモデル」を改変して4)領域実習のイメージができましたか 5)領域実習への興味はわきましたか 6)領域実習は面白そうだと思いますか 7)OSCEは新鮮でしたか 8)OSCEを何度でもやってみようと思いましたが 9)領域実習に対して親近感が持てましたか 10)OSCEの準備は自主的に行えましたか 11)自分の得意な方法でOSCEの学習ができましたか 12)事前学習を工夫したり納得できるまで繰り返しましたか 13)OSCEにより知識と実技の関連性に気づきましたか 14)OSCEにより学習目標が明確になりましたか 15)OSCEにより着実に学習を積み重ねられましたか 16)OSCEにより学習したことに自信がもてましたか 17)OSCEはやりがいがありましたか 18)OSCEは学習意欲を向上させましたか 19)OSCEにより学習内容が身につきましたか 20)OSCEによる学習方法は楽しめましたか 21)OSCEは領域実習の事前準備を促進しましたか 22)OSCEでうまくできなかった項目を復習したいと思いますか 23)OSCEにより主体的学習姿勢が養われましたか、について likert scale 4 件法 (1. とてもそう思う 2. まあそう思う 3. あまりそう思わない 4. 全くそう思わない) で回答を求めた。

アンケートは受験学生全員 119 名から回答が得られ、回収率は 100% であった。回答結果を図 1 に示す。図 1 は横軸を回答率、縦軸を質問番号とした。1)3)7)10)13)14)18)22)23) は、80% 以上の受験学生が 1. とてもそう思う 2. まあそう思うと回答した。<sup>6)8)16)20)</sup> は、60% 以上の受験学生が 3. あまりそう思わない 4. 全くそう

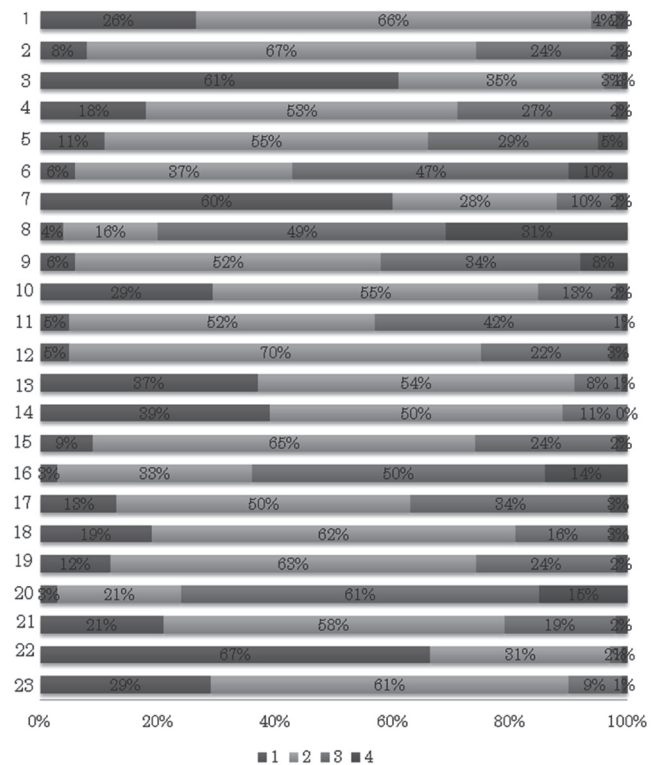


図 1 OSCE 受験学生アンケート結果 (n=119)

思わないと回答した。「学習動機づけ」の視点で、さらに詳細に分析する予定である。

#### 2. 評価者・模擬患者・4年生 学生ボランティアのアンケート結果

評価者を対象としたアンケートでは、38 名の回答 (回収率 90.4%) が得られた。OSCE の目的・開催時期の周知方法については、23 名 59% が適当であると回答した。課題数・内容については 24 名 67% が適当である、学生配置、試験時間など課題進行については 29 名 76% が適当である、役割分担、内容については 28 名 72% が適当である、評価票、コメントなど評価については 12 名 32% が問題なしと回答した。自由記載から今後の課題は、開催時期に関して【復習期間の確保のためにもう少し早い時期に実施する】【予習期間の確保のためにもう少し早く周知する】が指摘された。実施課題に関して【5 課題を一気に行うことで学生自身・自己評価がしにくいのではないか】【課

題の提示が不十分であり学生に意図が伝わっていない【評価内容および評価尺度がマッチしていない】【評価項目のポイントが不明確】【午前と午後で問題の公平性を担保できているか】が指摘された。評価・フィードバックに関して【評価票項目の順序性が学生の行動の流れとリンクしていない】【評価は主観的な要素が大きい】【評価項目が不足している】【評価の指標が必要である】【フィードバックの時間が少ない】が指摘された。模擬患者に関して【適切であった】【学生に気遣いをしてくださる方が多かった】といった意見がある反面、【ヒントを与えてしまう人やコメントが多く学生の動きに影響が出てしまうケースがあった】【どこまで動かして良いのか迷っていた】等の課題も指摘された。

模擬患者を対象としたアンケートでは、47名の回答（回収率96.0%）が得られた。模擬患者を担当して感じた問題点について、42名89%が「なし」と回答した。シナリオについて困ったこと、改善点では37名79%が「なし」と回答した。自由記載から今後の課題は、【学生の質問が多様でシナリオ通りに答えて良いか迷う事があった】【シナリオ通りに演技する事が難しかった】【患者役からの視点でのフィードバックも必要なのではないか】が指摘された。

4年生 学生ボランティアを対象としたアンケートでは、18名から回答（回収率94.7%）が得られた。OSCEの目的・開催時期、協力依頼などの周知方法については17名94%が適切であると回答した。ボランティアの人数や配置については12名67%が適当である、集合時間、拘束時間については14名78%が適当である、協力・ボランティア内容については16名89%が適当であると回答した。自由記述から今後の課題は、【終了後の片付けの人員増】が指摘された。

#### IV. 考 察

受験学生のアンケート結果から、「1. とてもそう思

う 2. まあそう思う」を合わせた回答率が8割を超えた項目は、【OSCEに備えて看護技術の復習をしたか】【OSCEにより自らの学習課題が自覚できたか】【OSCEは新鮮であったか】【OSCEの準備は自主的に行えたか】【OSCEにより知識と実技の関連性に気づいたか】【OSCEにより学習課題が明確になったか】【OSCEは学習意欲を向上させたか】【OSCEで上手くできなかった項目を復習したいか】【OSCEにより主体的学習姿勢が養われたか】であり、この結果から、OSCEを臨地実習直前の3年次に実施したことにより、臨地実習に向けて学習を促進する効果が得られたのではないかと考える。また、他の看護系大学におけるOSCE実施の先行研究においても、OSCEを受けた学生の8割が「OSCEは臨地実践力を身につけるために役立つ」「自己の技術力向上に相互学習や自己学習が役立った」と主体的な学習や技術練習が有意義であること<sup>6)</sup>、「学生の苦手とする技術の確認ができ、臨地実習での留意点が明確になった」という報告<sup>7)</sup>、「評価のフィードバックによる教育効果および患者役での対象理解と援助を受ける立場での技術評価ができた」という報告<sup>8)</sup>等があり、本学部が実施したトライアルOSCEにおいても同様の結果を得ることができたと思われる。このように、受験学生への学習効果の視点で今回実施したトライアルOSCEを評価してみると、臨地実習に向けた学習を促進する効果は大きく、その継続の必要性が示唆された。さらに、臨地実習直前に実施するOSCEの目的である「臨地実習に臨むにあたり、看護学生としてふさわしい態度・到達すべき看護技術を身につけているか否かを明らかにする」に対して、【心身を癒す看護実践能力の修得】を評価する機会となり得たのではないかと考える。

しかし一方では、OSCEの開催時期や実施課題、評価基準、フィードバック等の再考についても示唆され、今後への課題も明確化した。特に評価の信頼性については、先行研究においても指摘されているところであ

る。今後の開催時期については、OSCEで自覚した学生自身の課題を復習して臨地実習に臨むことができるよう配慮すること、実施課題および評価基準については、全領域を対象として全教員参加によりコンセンサスを得ながら作成していくこと、模擬患者参加によるフィードバックの検討等、今回のトライアルOSCEをベースとして、更なるブラッシュアップが必要と思われる。

#### 謝 辞

トライアルOSCEを実施するにあたり、模擬患者役としてお世話になりました静岡県三島市富士ビレッジ自治会、大宮町自治会、NTT退職者の会、新老人会、遊水匠の会の皆様、評価者としてお世話になりました順天堂大学医学部附属静岡病院の皆様、本学部特任教授、客員教授、専任教員の先生方、事務スタッフの皆様、4年生 学生ボランティアの皆様にご心より感謝申し上げます。

#### V. 引用文献

1) 中村恵子:看護OSCE. メヂカルフレンド社.2014.

- 2) 伴信太郎:客観的臨床能力試験—臨床能力の新しい評価法—.医学教育.2003.26(3).157-162.
- 3) 梶原理絵、中西純子:看護学士課程におけるOSCE活用の現状と課題に関する文献検討.愛媛県立医療技術大学紀要.2011.8(1).35-41.
- 4) 中村恵子:平成20-22年度「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」採択事業.学年別OSCEの到達度評価と教育方法の検討.最終報告.2011.
- 5) 文部科学省:大学における看護系人材育成のあり方に関する検討会最終報告.2011.3.11.
- 6) 高橋由紀 他:全領域の教員参加によるOSCE実施の評価—看護系大学生の認識から見たOSCEの意義—.茨城県立医療大学紀要.2009(14).1-10.
- 7) 内田倫子 他:成人看護学におけるOSCEの試み.南九州看護研究誌(1348-1894).(6)1.2008.55-61.
- 8) 多賀昌江 他:学生から見た客観的臨床能力評価(OSCE)トライアルの意義. SCU Journal of Design & Nursing(1881-9427).(3)1.27-34.